燕石襍志

一 俗兄方　　附 羽川陳重
二 田乞牲　　八 實語教
三 奇異　　九 我素也
四 縣神子　　十 天祿獸
五 塞翁馬　　十一 伊豆の海
六 相撲取黑船
七 西鶴

卷之五上止

曾5 116 ふ

鄙イ門
雑116
巻5

藝石雜志卷五之上冊

江戸　蓑笠軒　瀧澤解項吉述

一　俗呪方

治蜂蠆

蜂さされて痛堪がたくなれば門邊なる小石の半ば土中なるを撥起し上へしめさをかたまりて舊の如く伏おけばその痛忽ち去る

解犬毒

犬小蟹傷られたるとき冷水を汲て傷られたる処を浸し漬たびに藥汁を漬て

その上に灸して急に蝦蟇湯（蝦蟇一枚玄首尾）を用ひべし（治のぐ蝦蟇を捕その股の肉を食へばその效いよ〳〵速し大約獟犬のごとくに禽獸怒るときは必毒あり猫鼠鷄の類をもちて〳〵嵐を捕へべし〳〵牡雞の鬪ふ

但犬毒を酷しく蠱出たるとき傷られたるごとくれば倘傷られたるごとくれば毒獟犬と異なるべ

その毒暮月に至て再發し終に命を隕すものあり或い狂乱して物喪を

ゐるもののうりとれその毒爛するとき怪むべき足らず縱仙丹神藥を用ゐるとも赤小豆を忌ること年ゆく志ざんば毒の發すること初より倍々激しかるべし生ある犬も生人をうんぬんしその人を囓傷るありこれらい速に打殺しくその害を除くべし婦人の情をりくこれを憐むべくんばこの犬罪あり畜生を愛しく人を害ることあらんば主人の德を傷ふるあり東海道岡部驛より十八丸町ばかりある田舍に犬除の符を出すこと久しくこれのみ忘る事なかれ

解蛇毒

蝮蛇に傷られて腹痛とし乾柿を嚼碎くこの疾ぬれば毒氣忽に消散しく愈究めく效あり越前ある敦賀人のいく秋日藺を刈るとその中に蝮蛇多あり毎日これに嚼傷らるくこと刈常熟く怖れど白柿を搗潰し麻油りくこれに器中に藏ひるを腰の痛を多べく藺を刈果て後に傷ある箇所を附れば毒氣を吸ひ消散くあるに病ひ不愈ことなく亦近屬に戸ある人の奴隸醉狂して小蛇を呑たりしこれ腹中にありくれるべ苦痛堪難くこれ百藥効なく最後に白柿數十枚を水藥しく五六碗を腹さるれば便に至りて水瀉し遂に恙なくこれを以て草ありて妙なるかりの白柿を貯へく

避鼠

鼠は人を食ひ牛馬を食ひ盡すに至れども不痛この鼠りくこれを其に鼠とその私名所未久知称須美人を食ひ牛疋を食られを凜ぐと百計すれども功なくこれ大なる糸巳を取くその人の臥たる四方を引繞くしこれを枕辺に置けその鼠亦去ることく春秋定公十有五年春王正月。鼠鼠食郊牛。死改卜牛。又平家物語に平相國の馬の尾に鼠巣を為るとのみ見え

治齲

齲を患るの節分の日に用ひる鰯の骨を霜とくその痛む歯へ銜むれば即愈亦咒法ありて發燬木の表裏へ危のごく數箇字を顯し紙にくこれを封じ家の柱へ貼くて上歯痛まば上なる圈中へ釘を打て歯痛まばなる圈中へ釘を

打つべしかけばその痛隨て散ぜんとす鍼をあて〻そりて針の沉をとりぬく

表

○ ○ 蚘蛇及蝮蝎

裏

上色へこの焼き書ぐべし

新いあるところを用ひ鍼も洗ひ淨むべし凡貼をすること二三十日齒の痛全く去て後芽い河へ投げんし是俗兒とゝもに予往〻試るに驗あり又蓋をして齒の虫をとる方あり亦乳方あり〻ぐ齲の患を除ぐべしもろ〻人よ授ぐし

養齒方

まろ〻蛤の肉を去その一隻の貝へ塩をけた亦一隻へ飯をつめ合たゝ火中よ授ぐ燒果て後搖出ゝ搗碎て多朝こまをとゝ〻齒を磨けばそう〻口熱を去て老後よ齒の脫ること稀なり蛤のまろを獲ざるとき青竹の節をとゝ〻五六すよ截とり筒の中へ塩をつ

允筒とも丸燒て搗碎たるもよ亦翠実をとりてくられを塩よ和ぜ〻西相とすることを松葉塩とゝ〻ぐるも蛤の功竹と松とよ搗まり○齒の弱年より自愛もべ〻予著述の勞よりて年四十よりて齒二枚を脫ゝ先その脫る不條よ糸切齒と呼るものより早むられ又ゝ時好ゝ以上を齧碎て或い絲或い索齒の役に隨て多を用ひどゝ〻嚼ることたるその損初老の今よ至て又ゝ〻めて多れ〻をめれば予が齒のあるあひだ多い著述の勞とゝ〻ども笑い弱年の蔽ゝ〻葉餌の效驗ゝ小患のことよあり老後の難生ゝ弱宮の時よあり終よ自記〻ゝ〻ゝ呪孫を誡む

援利茅方

蟷螂を活ゝ〻ら絲よ強て隈乾よすること三十日ゝ〻ゝ〻の母死ざるものゝ〻さて〻ら〻乾果て細末ゝ〻飯糊こ和とれを附ぶべよ〻利茅を援ぐ〻とれい高坂彈正の乳方ゝ〻とぞ試よ柱よ釘をうちの上ゝ〻件の茶を一塗あゝよ一宿を弱れば釘の氏必許出るとゝ〻予ゝ〻ぐ試ぐ

俗火傷

湯火よ傷られたるゝ胡瓜の水をとり〻

洗めて数回もれば其の痛直ちに去て愈て迹なしと又緑豆の水も效あり貯
ておき又咒めり龍樹王如来授吾行持北方壬癸禁火大法龍樹王如来吾
是北方壬癸水勅除天下火星辰悉降息息如律令と咒畢て眞武印
を握て頭を吹て冷水少許を以洗べし少しを焼て小児も療らべし

見于紳兄志

水溺急救

夏月水に溺れて胡瓜を切て口内に含べし擂盆にて擂碎て口内に含めて其人の鳩尾へ押當布にて
その上を厚く結ひて逆さまに引て腹中の水を悉く吐くべし

疱瘡洗傷

小児の疱瘡を洗べし即活

藜の火にて燒て即活

解魚毒

堅魚鯖の類その毒に當られ病るに椎茸を水煎して腹に
服すれば

黑砂糖

黑砂糖を嘗るも效あり河豚にあたりて
蘆根を水煎して用べし其の毒を解ず赤石脂を霜として腹に
服すれば
或は槐花末を水調て或は蘆臚水或は至宝丹或は撒模子等の
丹薬を服て汗豚を食べ即死

治病舟者

舟
頃て醒ざるものは大魚の胃中にあり早く化せざる小魚を死
て腹に入れば即效あり凡水行をなすものは己れを以て人を
制する術を飲べし病に○遠行するものは
大第を燒て足底に塗べし
痛と又草鞋に傷られば亦高濂が俗事を以防風 細
辛 草烏 一名用 藁本 衣細末として鞋底草履に膠水をもて塗れを治す

避煙

遠行して見る蘭痛ものの羅蔔を以て
煙に悩ぶ亦火焔に悩て死るものは羅蔔の

汁を口そそぎ入るれば甦生すと中山之柳子が酸醐隨筆よりえたり○
予髫歳うりまつ蜜そ〜ぶくりそ〜火を滅さんと又氣例ようそく二尺
新牛の茶を禁じされば何ゆえ生まそ〜四十餘年の今まぐいのちぐ嘗炭より
過ぎ豈偶然なる故実なる不測の幸そ〜まぐ曹たらんのそ勉發發の燒さ
〜煙草の吹がらうどをぶりそ〜滅とぶらぐど○鄰里より失火ありとれ類
燒ぶべんやネやをそうんまい先ッ主人の脉を診ぐ〜その炭服れめそれ
主人の脉絶たるが如〜と一老人ありさもあらん欲○主たる人毎夜より臥房より
めらんとするとれ氣中を巡りて大の用心せよ戸鎖を固せよといばその氣
力満て〜失火ありて又盗人入らんとかくいとまなれそ懈るもの多
かり又毎歳節分の夜大歳の夜正月六日十四日夜亟時より井水を汲て清
淨なる磁器に盛りそれを一滴も溢さぐるやうに竈神に供じて明朝卯時より
驚の井より返〜入るるべそのれ失ぬちんとりの忘るぐらぐん

避木虱 三月雛

殺羽虱 鶏より羽

棚より供じたる蛤を樹の枝にかれバその年木虱生ちん

虱の生たるまい荊枝四ヨ防風四ヨ草烏頭三ヨ水煮〜ら〜ら〜〜〜一鶏了
浴ぶれば悉その羽虱を生ぐ〜○人家常に鰻鱔を燒バ諸虫を避鰻鱔店より
蠅なるべんこのなし

治病猫

禽獸の病いまる疲て鳥獣魚類の病死〜たるも
い食ふるるふぐ猫の疲い必吐をて〜胡椒を削て魚肉より交て餌バ昂治
亦烏藥水を以灌ぐ甚良と時珍いくり凡猫い鐵を忌ものく魚骨を飲ふ
和し餌とし常より鐵大箭を呑ぐもれバその猫痩て命短し

治盆樹

鉢
栽ぐたる樹の半枯れて治がうとあり根その樹を抜て土を節りより
曝をと一日さくその根を溷の中より浸をを一帖を搗て〜ぬぐび植ぐ
更治六七月のころ最驗あり

除金魚虱

金魚の痩て身より白帶あり虱の
ぐるぐるぐ〜ぬぐ〜ぐ〜ぐ〜ぬ死とそのとれ〜毛を人糞の中より債引
ぬ〜ぐ〜ぬ晒〜糞を洗ひぐ〜ぐ〜その生養へのるぬび虱をまぐ〜金魚る

め〳〵活られい秘苑要術よりえらび

治病鳥 鷄塒とぐ〳〵小鳥の糞つきして

拇ちゝ〳〵形すゝらるゝなるゝ死を中〳〵破石を餌の中に包こみ丸ゝとなりてこれを

飼ふべし〳〵その鳥破石を呑て糞をすれば即活

修書 書籍の破損蟲たゝ

を修補に或ハ糊糅糊或ハ生麩糊をもゝ〳〵すれば物〳〵むしの穴のり蟲と

破損ちがひに倍して海蘿を用ふべし〳〵海蘿ゝ〳〵すれば白臭生せず〇

白臭多く黴雨の時節に生ず四月のちがひに書を晒〳〵箱にあゝめその

蔓延ふらぬ黴雨中の風にあてざれば白臭す又寒中に書を晒ゝ春蟲

ぜず書中に書紙晒ゝ〳〵その冷るを俟て箱に納めざれば却白臭を生

除油汚書 悟〳〵冊子に油を汚ぬるゝ屋上の漆灰を取て未とな

し紙の裏ゝ塗りあり熨斗ゝ一宿紙押れば油悉脱ゝ〳〵迹なし衣裳へ

油をあたるゝこの方を用ふべし屋上の漆灰ハ風雨にゝられ灰汁なり

ゝ〳〵用ゝ堪たゝ尋常の石灰をゝりあれがその迹脱ぬゝ又俗事

方に海漂蜂 滑石各二分 龍骨一分 白堊一両 共に細末にして紙をもて汚れ

を熨法のごとくすれば大凡油の汚ゝとまれる時ハ水をもて浸ゝ一宿にして

緩ゝ乾し藥を用るも亦可

取錯字 書を写すとの錯字〳〵ゝ〳〵これを除く

去らんとすれば蔓荊子二文 龍骨一文 相子霜五分 定粉少許 右ものゝ末

ゝ〳〵水を字の上に點〳〵末をもゝ〳〵ゝられる糅乾くを候て拂去べし 俗事

讀書燈 香油一匙に油三両をのゝ〳〵点ぜんば久〳〵耐て〳〵あゝ又盞の

中に塩を置ハ亂その油を絶ゝらぬ油を育れ姜を以盞邊を擦れば暈を生

ぜず 同書

主夜神呪 霍亂人不忘夢而惡夢者也。宜援主夜神

呪。況成式曰陽雜俎載。主夜神呪曰。婆珊婆演底

持之夜行及寐可却恐怖惡夢云。李石續博物志底

作帝。又唐雍益堅神呪志曰。華嚴經之言曰。善才童

子參善知識至鬧浮摩竭提國迦毗羅城見主夜神。

曰。婆珊婆演底。然則甚神験也。亦續神呪志。有悪夢
況。曰。太素真人避悪夢法。一曰魂妖。二曰心試。三曰
尸賊。此乃厭溺之方也。以左手捻人中二七過。叩歯
二七通。微祝曰。大阿真玄長練三魂。第一魂。速守七
魄。第二魂。速守泥丸。第三魂。受心節度。速啓太素三
元君。向遇不祥之夢。是七魂遊尸来恠邪源。急召桃
康護命上告帝君。五老九真各守體門。黄闕神師紫
戸狗軍。把鉞握鈴消滅悪精。返凶成吉生死無縁。畢。
若又臥必獲吉徳。亦拾苏鈔載。夢誦曰。悪夢萩草
木。吉夢成寶王（見夢誦之三反）桑樹下談話又云。南無功徳須弥厳王
如来。（一反）又己上向東灑水誦之。曰。福徳増長須弥功徳神
チカエラスレバユルサレニケリ吉夢ノ誦

変王如来又云。南無成就須弥功徳王如来

陰莖 小四人悩ム蛇刺ル小便をするとき蛇刺れば怨その気ふ吹れて陰莖腫る
ひりのくそのとき何処よりもあれ蛇刺を掘出し洗ひ落し驚の如く埋れ
い即愈 避狐 夷鳥を獲て夜行せば發燥を夷盆のまま納べし
ゆべ狐の為に奪ふ事あり狐を硫黄をあぶるべし 避驟雨 口傳 傘を羅蓋
の綾付をひけば濡るゝ事なし紙帽子もまた半日の驟雨を避ぐ

三 四足怪

狸の異名を野猫といひ猫の異名を家狸を捕し代れば多く奴婢い田怪又田猫ともいふ私名鈔云。兼名苑云。狸
音蠱 和名 太奴木 搏鳥為糧者也。ものを狐狸に刺されてその数い狐より拙
四狐を稲荷の神の使者とし神にあるものれど狸はさら肉すれ
婦幼ども茂ることを母めらる物と幸不幸あることをみのがれ但彼が生出

高名の大平廣記によれば千歳の老狸書生に化して董仲舒を試みるに
もとめられたる搜神記に老狸を老狐として董仲舒を張茂先と云
べしとそれぞれ一休話説にもあり右馬の親元臨終のとき門徒陀如
来紫雲に駕して影向あり親元を射る狸なりとのたまふ親
元あやまちて宇治拾遺物語茅八巻十七法に載せられ愛宕山に年来行法師より
比普賢菩薩象に乗りて影向ありしを射るに狸夫なり
なるを怪しみ疑ひ九月廿日の夜間に彼普賢菩薩を射られたる
狸の化けたる物語を取て猟夫を親元に作りて普賢を阿弥陀
とせり○佐渡国二岩城作に山中に年来ありて捜む弾三郎と云ふ狸
ハ頻霊ありて人を金銭貸借を彼に借らんとせば金
の負債と返璧の日限を書付られて名印を押て穴のほとりにさしおき
結句亦ゆたかなる貸んとせば金穴のほとりに金銭借あり後に今銭借
あるまて返さるるものも亦鞍あり返さで貸さるるものとぞ醫師伯仙ハ佐
渡の人なり三世方伎にして嘗佐渡にありしとき一夕隣里なる某甲
急病あり医者輙ち齎らして可嚀に迎へらるるに人ありて辞するに
こたへてその家に赴て湯茶膏薬を与へ亦送られて帰りて四文銭を
得て患人にとらせ果してそこばくを謝物として金
百顆を盆に盛て差出されば醫師大に怪みて是を受ず僅に
四五貼の薬剤を進らしたるに謝物をとくべからずとて年来こ
住べき高恩なりその名を表ぐるものなり抑是ハ何人ぞと問へば件の男ち
ほうえきに疑ひもはりまれい人間なれども二岩の弾三郎といひしとの金を
かくめのひねくりのみ醫師氏をとらち掉て弾三郎なるべしと受ず金銭
ハ人間日用の宝にして禽獸の為に益なり故蓋に必不良の財
なるべしとて弾三郎又いらくなれが金ハ不出のものなるべし或ハ兵火に

係り或い洪水よりく溝壑に埋まるものを拾ひあつめて貧人を潤すのを
疑ひて受めつと請とゝもれども醫師固辭て受ざりしかばその日いなむ
立後を次の日に短刀一口をもてきたりて門内に置形を消てあるをもてりうんぞ
貞家が釗たるものなれば耳未秘蔵たり固まの蔭を夢みて疾病
忽ちまさりぬるに物受めいなかりしかをめてるぶ恋
果さるべくもとひろく力を主人のほとりに置形を消てあるをもてりうんぞ
彼短刀を伯仙よりてく家宝とぞりとひ伝へてりとるんとその先
土俗の口碑に迷ひ昔物語りて今い彼老狸をてるものといひあるべ
とるらねど童子のあるに祀ひのに是不れたりとも按ずるに越後名寄 巻三
十一云寺泊出雲崎の海邊にて春夏秋の間天たれるをもべ海上遥に佐
渡を眺ぶれば二ツ山のりてあるもの雲にもあらべ霞にもあらべ青ゝと黒色
を帯たる気のりたりく或い樓閣或い城郭渡殿廊下築墻石垣に至るもの

西巖圖説并春日宗二郎傳

その書摘び果ずに佐渡國雑太郡相川の人石井文吉平夏 江戸にまゐ
りて草廬を結ぶ彼二ツ岩なる老狸彈二郎がり医師の奇詐をもて
その虚實を問ばこれを古老のいひ伝へるに虚誕なるべしとかの篇
述めるべしといひけれどもこれ夏海が東部へまゐりてみまこと
ふりつゞけて九月十八日の夕まぐれより彼二ツ岩へいりてみづから圖
らる一張をりて未まりしその巻のまゝへ追加しあらべ幸甚なりとい
ふ事なりもその図をもてるものの於ひられべ模写してこれを載せ門人筆記
全部五巻二冊を以てその書よ 頌德院の山陵苔梅及二見の老梅等所山の花松及秋の七草
種くの異聞をもて又高坂彈正の侵春日惣次郎常國へ漂泊して聞村太連寺にあい
て中陽軍鑑を書刷ひ四十歳の春三月没ス墳墓ハ太運寺羅漢堂の側にあり
伯父の彈正も渡海して新穂村に居住し軍鑑を著述せり後へもて死れてこの
後高坂彈正ハ彈正の姪なるも相川山の内に漂泊して山稼ひ曼を高坂を歩とりて

平里山
いりやま
羽田村
下戸村

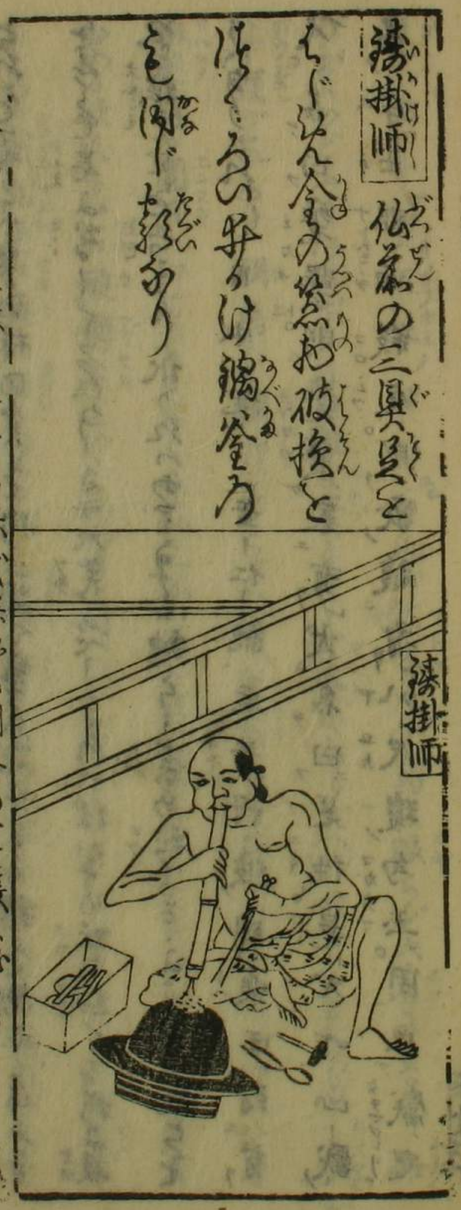
光寺山
二ツ岩
此一張文化己巳秋九月十八日
於二岩山中平夏海所圖也同年
十月廿二日稟家君命模寫之
江戸
十二年琴岌

巢居如鵲雨暘
巢居如鵲屋巢
兩ノ巖雙ビ立テ高サ共ニ數仞
喜ミトメ松ノ柏森ノ然タリ云

全備しるくそなへ繪市廛樓ふかうぐられい佐渡なる二ツ山よ彈三郎とい
ふ人ありこれが所為くとそ時くとれぬりとぶを佐渡ふ拙なる粗と務めりこ
吹草の用をあなり亦異造化不測の功なり
或問まが親らの書の前巻よえ禄年間鳴渡ケ井とりふるの吹草をりる
ぎりこうりてらくとらのしろやちぐれ世よ吹草なりし欣茶て云ふる吹草のる
ふくとそ人倫刻蒙圖彙よ載たり派治鑄物治の圖をとれば
吹草ふを但鳴渡ケ井吹草をりぶんとれ乙ふらうづ質素なれば
同書よ仙秩燒の圖を妙ちぐ今堀蕊餅と呼る物のそるりとかぐて
炮爐をめけしる燒鍋ふく燒てをりめれば形ふて仙秩を燒ふ禄
以後よちぐれるふぐ間よその圖を摹しるくふ出しつ

人倫刻蒙圖彙

全七巻え禄三年庚午七月発行作者不詳画を
蒔絵師原三郎ふるの筆と書肆平楽寺梓



湯掛師　仙秩の三具をちぐ仙人の絵ふ彼換とけくるの毋ける鍋釜ふも用ひ彩あり

この圖巻の六ノ廿二張よえ禄ふ亦煮餅師ふ同巻の十七張よ出ふ

煮餅師　ふ餅よあつて
ぶ

佐渡ニ狐ありれば狸絶の人ニ憑とあり八丈嶋ニ狐狸絶なられバ山猫の人
ニ憑とあり人彼を缺べられ補ふ物の患い造物者も全除ぬ
なるべし○近ル世のあるし鎌倉なる付ゞの院の使僧ところ〳〵伊豆殺生
の罰を蒙縁ある僧あり人の画をとらんとて村夫山妻られを求ゆ
河あり遂ニ沼津ニ至つて物ニ嘯きて死ス人あゞろ死〳〵の死をえて
狸の化ける件の狸が画れたり妻の画を沼津なる某甲が家ニ蒙む
られをとるニ蒙の柿の実を御山園ニ蒙ニ死ニ穂を御ものこの
をとゝで鳥ニなるゝ〳〵ひすゝられ笑ふべ〳〵されば狸ハその妖の性ゝ及
ゞ狼と完を共ゝ〳〵水ハ九ハめをうゞ神と崇め祀ゝるゝようあたゝを
うべゝりられ○日本紀 垂仁紀云昔丹波国桑田村有
人名曰甕襲則甕襲家有犬名曰足往是犬咋山獣
名牟士那而殺之則獣腹有八尺瓊勾玉因以獻之

是王今有石上神宮めれば鮮荅ハ牛馬ニ限らず六畜ニ通ずあり貂
のおいとりられどられも狐ニ棄ル世俗いゝ〳〵○山海の字海ある上林
峯頂が家〳〵鯛魚を調理ゝ〳〵腹を裂ゝ〳〵中山三柳子が隨筆ニ云えられば鮮荅ハ臭ニ
周囲ある圓石二ツ出るゝ〳〵腹のはゝ八九寸
もある砂人ハ石瘕癖石といふ病ありといへば小豆ニ煮むめ〳〵楚王の妃の産
しといふ鐵丸も石瘕の類とゝ〳〵凡六畜の玉を産ゝ〳〵その病のいとも
あるゝ〳〵を〳〵雨を祷ゝ〳〵ば愈あるゝ〳〵輟耕録巻ノ四ニ物の産む玉を
宝といへば貂ゝ〳〵本草綱目巻五十
牛馬のゝを考ふ
再接ずゝ〳〵た蛇ハ田猫ゝ〳〵ぬハ猫ゝ〳〵通ひ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵 廣雅云貍
一一種面而尾ハ似牛故名玉一面又名牛尾人家捕畜
ゝ鼠皆帖伏不復出穴 廣石川
宝海 めれば唐山ニ狸を野猫と
異名ゝ〳〵どこのゝ〳〵草野猫ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵めれば狸を田猫と訓一音をゝ〳〵

たぬれとゝふ田い田舎の民あそ〳〵野とゝなるゝ
周よりゝつゝ家嘗一黒猫児を畜ゝたゝの猫寛政七年乙卯十月
十八日よ同郷の商蔦佐ゝり獲たゝ時よ三歳ゝ嵐を捕ゝそのゝを野驢
と唱ゝ文化二年乙丑七月六日よ老死ゝりゝ家よゝと十一年時く
十三歳ゝり犬猫い五七歳ゝく斃ゝゝのゝれど稀ゝい長寿のゝもゝり
ゝを亦いぬる戊辰年五月よ孩児ゝ畜たゝ九月廿日よゝて
死ゝりゝ〳〵ゝゝゝゝ生べゝりゝよ女児ゝゝゝゝ武火よゝて餌の乾
しゝよゝ死ゝ八月上旬ゝゝ籠よ紙の掩をゝ遠くゝをゝゝめゝ
快晴の時い日よ曝し夜い綿よ包ゝ餌いたゝゝ梨よ柿をゝてゝれよ
餌ゝり五月中旬ゝり六月の間を経ゝ七八九月と凡六箇月ゝゝ
ゝゝよゝ八の難生もゝの蕪のゝゝゝゝ上寿を保ゝゝゝゝ寒暑よゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ

三 奇異

古人今俗奇を好ゝるゝの稀ゝもゝれゝも北越の七奇異南海の不家蟹西
海の不知火関東の富士の農男ゝゝい常よゝも熟ゝ生ゝ熟ゝ生ゝ奇
ゝゝゝゝゝゝ奇ゝゝゝゝ狗の長鳴鶏の宵鳴烏のゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
怪ゝゝ不祥ゝゝ衣よ赤鳥の糞を被ゝれ帯のゝゝゝゝ結ゝゝれゝゝ
を祝ゝゝ吉祥ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
怪ゝゝゝ吉祥ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝれを辨ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ〇堯舜の時鳳凰来儀ゝ王莽ゝ時赤鳳凰ゝゝ函陽門の対よ止る
夫妻舜の徳を慕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
盟津よ白魚を乗よ打を渡ゝゝ中流ゝゝゝ白魚躍ゝ王の舟よ入ゝゝ

史記周本紀注ニハ馬融曰。奐者介鱗之物。兵象也。白者殷家之正色。言殷兵衆與周之象也。○平相國清盛安藝守ニシテ伊勢國安能の津ニ至リ艤ヲ繫ギ熊野権現ヘ詣ル。ヲリ白魚躍テ其舟ニ入リ。平家物語ニ此ノ瑞周武王の故事ニ倣ヒ食テ魚腹ニ葬ラル。調味シテ食ヒ給フ。平家物語源平盛衰記ニハ新田左中将義貞朝臣越前國金崎の城ニ籠リ延元元年十月廿日の曙ニ江雪霜ヲ凝シ中ニ寒月ノ明リ東宮ヲ良親王ヲ慰メ奉ラントテ舟ヲ金崎ニ浮ベ義貞義助實世維頼赤萬壽樂ヲ奏シ給ヒ白魚跳テ其舟ニ入リ。亦是周武の故事ニ倣ヒ調テ食シ給ヒ義貞ヲ調ヒ給ヒ其の旅を東宮ニ進ジ給フ。左平記ニハ白魚の瑞ヲ以テ武王ハ殷ニ代ハリ紂を滅シテ周八百年の基を開き給ヒ清盛ハ為義義朝を伐テ官爵人臣の位を極メ給フ。とぞ南朝の君臣の義を幸ヒ奉リ金崎の城を攻落シ東宮ハ自殺シ奉リ義貞も足利ヲ滅シ給フ。封元元年ヒ崩ル。周武と平氏のあハ吉祥ハ南朝ハ悪兆なり。○ 神武天皇の御時皇師中剛ニ対シ奮ンとせしに金山中嶮絶ニ復行路ナシ時ニ頭八咫烏来リ翔降テ御道者トなりつ亦漢光武帝年九才のとき其の父母ハ王莽逼ラレ光武獨脱奔ンとせしに武帝ハ盲ヒ給ヒ路ニ迷ヒ時ニ一黒鴉あり翔ケリ導キ御道者トなる。漢の瑞あるべ○賈逵が長沙王の傅となりし三年に鵲ハ悪鳥なるの舎ニ飛ビ入リ坐隅ニ止リ鵲ハ似テ不祥の鳥なり賈逵既ニ長沙ニ謫居シテ幽ケキ怪鳥を慎ミ給フ。その壽の長カラザルを知リて遂ニ鵩鳥賦を作リ給ヒ。とぞ。亦東鑑ニ建久四年正月五日ニ藤左衛門尉祐経が家ニ怪鳥飛入るその号を問ヒ時雄の

雄の郷〜　へイ社もそうさうん鵰鳥うらん鵰確類書云巴蜀異物志云。
鵰鳥小如雄體有文采不能遠飛云云ふらるゝ鳥ト並さるの如慎怪か
らん仍祈禱をとつて是いらの年五月廿八日より新経富士の狩倉より系と
祐成時致ホより伐るの象ともいらん欲られらい和漢その不祥なり〇
近衛院の仁平年間内裡より怪鳥あり源頼政朝臣勅を奉うけられを射
おとられい保元の乱おらぶんとするの象ともいいんう　後醍醐帝の建武元年
亦内裡より怪鳥あり隠岐二島左衛門尉廣有られを射るゆゝて南北朝とろう
はゆんれ〇百一練鉄云云。天延二年四月一日。南殿母屋柱
孔如牛。云云。られいとの年十一月廿八日より武徳殿焼亡の象ともいらん欲東
鑑建暦二年四月六日。将軍家実朝御病悩而小御所
東面於柱根花開。られらゝ六角年を経ゝ義久元年正月廿七日の
夜実朝公暁より害せられあひよりれいらん祥ふゆゝぶめれど非常の怪い
宮殿の如ゝ赤色草木の蹼なり赤ゝとるる足らぬこの餘の奇異をいくぐもゆゝべゝとふら

千百が一を録ゝ〜天変地妖も時ゆゝ〜有ゝぶるうをいゝんのそ子ー思
曰。至ー誠之ー道可ー以前ー知ス。国家将興必有ー祥ー国ー家将
亡必有ー妖孽。見ー乎蓍龜ニ。動ニ乎四ー體ニ。禍ー福将ニ至ー善必ー先
知ー之。不ー善必ー先知ー之。故至ー誠如ー神。うべるを人先祥ゆゝ
善をうとりのゆゝあらぶ人先妖孽ゆゝ〜悪をうとりのゆゝあらぶ禍福
吉凶いらぶゝ招くりのゆれば善人もられをたゝ悪人もられをたゝ正人い
邪ゆゝ故ゆ怪をうんとも怪ぶ史記ゆ宋景公三箇の善言ゆゝて災怪
二度を徒といつてもられ至誠の致ととろ欲もられども災怪い宋ゆ禍せんと
ゝ出るゆゝあらぶ煎星宋ゆ招くところ天変地妖をるとゆ至ゝ景公おを
ゆゝ〜善うんともゆゝて徒るとゆゝ速ゆる段その過を悔ゝ行を改め
徳を修めて善を積ば災惑二度を徒ぶゝも宋ノ国ゆ禍ゆゝ〜甚を
ゆる世俗の奇を好むより一小奇異をうれば大息歎る漢ー疑い猜忌を

生ずと一大形よ吠えび群犬ハ声よ吼一時草難大王をよびハ〳〵〳〵竹の盆うわ
らん正ハ怪をうんでそをゝ〳〵その怪散〳〵終よ怪ハ

四 縣神子

縣神子ハ和名鈔よ載せん今俗ハうんを梓神子亦市子とうふ梓ハ檀弓の
義欲市ハ縣とハ縣とハ縣とハ如〳〵この巫唐山ハ漢の時既よあり王充論衡ニ云
世間死者。今生人殄而用之言及巫叩元絃下上死人
魂因巫ロ語皆誇誕之言也見于巻二十之十六張

五 塞翁馬

塞翁ガ馬の故事ハ淮南子の人間訓ハ出てうらうハうらゝうりのあ〳〵
ゝ彼書ハ牛馬をゝ〳〵対とん王充論衡ハその牛馬載て馬を牧
ぶとうら〳〵後の類書小説ハ馬を載〳〵牛を牧めぶてをゝ〳〵世乃
童子ホ塞翁ガ故事ハ対ハ陳をうぶ陳歌ハと送恨のゝと今童蒙の

乃ハ本文を抄録ゝと王充ハ全く列子ハうゝ列子巻八説符の編を并ゝ
淮ー南鴻烈解云。昔ー者宋ー人ノ好ム善者。解按論衡作宋人有好善行者二ー世不ー解
家ニ無ー故而黒牛生ニ白犢ヲ以問ニ先ー生ニ。論衡先生為孔子以下效之。先生ノ曰。此
吉ー祥ナリ以饗ニ鬼神ニ。註ニ先生凡先人生者也以饗鬼神ニ白犢純色ニ。可ニ以為ニ牲也○解按王充論衡饗作享。居ー一年。其ノ父無
故而盲ヲ。牛ー又復生ニ白ー犢ヲ者無復字。其ノ父復使其ノ子ヲ以問ニ先
生ニ。其ノ子ノ曰。前聽ニ先生ノ言ヲ而失ヒ明ヲ。今又復問ヘ之ヲ奈何。其
父ノ曰。聖人之言ハ。先ー忤而後ー合。其ノ事未ー究。固ー試往復問ヘ
之ヲ。解按論衡者無其日以下三十六字。其ノ子又復問ヘ先生ニ。先生曰。此ー吉祥也。復
以饗ニ鬼神ニ。歸テ致ス命ヲ。其ノ父ノ曰。行ヒ先ー生之言ヲ。論衡孔子曰。此吉祥也以享鬼神復以牛饗ス。居ー一年。其ノ子又無ー故而盲ヲ。其ノ後楚攻ー宋ヲ圍ニ其ノ城。
莊楚莊王時。圍ハ九月也。當ニ此ノ時ニ易ヘテ子ヲ而食ヒ。析ヒテ骸ヲ而炊ク。丁ー壯者ハ死。老ー病
童ー児ハ上ー城牢守リテ而不下ラ。楚ー王大ニ怒ル。城ー已破レテ。諸城守ル者ハ

皆屠之。今按楚攻宋之事百雷。而屠戮之事無焉。此獨以父子盲之故得
玉亮論衡老病以下一十五字脱文。
無棄城軍罷圍解則父子俱視註視復明也夫禍福之轉而
相生其変難見也。近塞上之人有善術者馬。無故亡
而入胡。胡人皆弔之。其父曰。此何遽不為福乎。居数
月。其馬将胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰。此何遽不
能為禍乎。家富良馬。其子好騎墮而折其髀。人皆弔
之。其父曰。此何不遽為福乎。居一年。胡人大入塞丁
壯者引絃而戰。近塞之人死者十九。此獨以跛之故。
父子相保。故福之為禍。禍之為福。化不可極。深不可
測也。見千巻十八。八回訓。

曲亭子云。古凶如糾纆。福也禍也。禍福如環。人而萬
事塞翁馬。推枕軒中聽雨眠。とうの詩を吟ずるにいかをろ

ぶべ。何をろ哀れ一書よ高谷ゞ詩の序を引く塞翁姓いまゆうとしよ
信ゞ的ゝ原寓言ゆゑ塞ハ北ゆうりうりて和歌まいきとのかきゆとあ
ゆ塩嚢抄云。後鳥羽院義久の乱よりて隠岐国へ迂されゆひ
述懐の御製。
いつとなく北の翁ゞどうさびしのとりやとしハ五十ゆん
餘塞翁を謝る歌失木集よめりゝ入ゆりゝ又世俗の諺よ禍も三年ゆりゝ
盖よりうとりのも塞翁ハゝ故ゆりうゝ塞翁ハゝ倚伏を識りめゝ大約
一部の小説を作ゆ人間栄枯得失の理を述んよりとの翁よ拠ゝ説を
あとさゞるものゆ醍醐随筆よ平治の敗軍よ頼朝の父義朝よ後きて擣を
ゆゝしハ函よ似ゝれど義兵を起ゝゝ平族を鏖ゆ天下の権を執よ至てハ
吉ゆゆその中よとりゆゝ義孤西海の軍功抜群ゆゝしハ吉ゆゆれども軍敗
よ囚ゝゝ身を喪よゝゝゝ凶ゆゆその中よとりれを梶原ゞ君恩を学ゆて
大小名よ倚重ゆゝれゝハ吉ゆゆ似ゝれども三族を夷らゝよ至ゝゝハ凶ゆ

そ中よりされを名氏朝敵となりて義貞よりて鎌倉よりて髪を
剪西国の果ちこぐ没落したる山ゆる似しれども天下の武ゆと仰き
十四代の基代保れしよりて吉ゆその中よりされをられば吉凶を
常よその身よ相依るとそぐ皇あらざるべしとて今按ずるよ
孫子よ多い福艾の相をえふひとくるもそのとろ同じ福ハなの如しずを
老ゆり福相壽相の大将ハ百戦を経とくそたびその身失ゆ傷らなと
いとども憂ゆくて功をゆをびゆり所謂塞翁ハ福艾の相ゆりの欲人の骨
相ハ一日の天象よ晴雨ゆるが如し人間の生涯を一日とえて辨論す
るとれハ初凶ゆて後吉ゆるゆ人ハ朝よ曇て夕ハ晴るが如し初ハ吉ゆて
て後よ凶ゆよ遇ゆ人ハ朝よ晴るゆへよ雨ゆるがごし又富貴の家よ生れて
一生ゆ異ゆる人ハ且より暮よぐ快晴ゆる日のごし貧乏の家よ生れて
生涯患苦よ沈淪ゆる人ハ且より暮よぐ風雨止ざるが如しゆれば凝相

ゆ人ようそその吉凶よ初中後ゆ道の博士よ弱出ゆし○亦按ずるよ
淮南子の塞翁ゆ馬のゆハ荘子よハ根元ゆ荘子よハ寓言を牛馬よ取
て妻ゆり齊物論天地ハ一指也。萬物ハ一馬也。又應帝王篇
一ハ以已為馬。一ハ以已為牛。ゆとハ類られしとの餘枝葉よ違
ゆ人ゆ

㊇ 相撲取黒船

大森杖信とりゆ人の隨筆をえしよ元文のとろゆとかゆえ黒船と呼
ゆ相撲とり京都鴨河下立賣橋の欄干よ猛ゆとて死ゆとりよ辞世の
和歌ゆえ「ゆせゆどゆ世ゆるゆひゆらゆいゆぜゆひゆ死よゆゆ」
ゆハ剛強をゆゆとするゆゆ辞世の歌を送ちしとゆいえゆゆ
ゆゆ婦人の仁ゆ仁ゆるゆよハ勝べく匹夫の勇ゆ勇ゆるゆよハ勝べく孤を忘
ゆゆるゆハ非命の死ゆ可ゆり只教ゆるゆゆるゆその迷ゆ解ざるゆゆ原本よ

年月日時を記したりしが忘るゝを操狂言の作者が思ひ出たるゝ
こゝをもしいとなるべし

㊐ 西鶴 羽川珍重 附

西鶴は井原氏なり年来ひさしく大阪淡路町に住る難波鶴難波
雀ホトトギスなり宗因門人なり松寿軒と号し亦難波俳林と称す点語は
最上の点なり長点以下つゝの如し物見車より
しとゝどもらく世情に渉りて戯作の冊子あまた著はし一時虚名を
高だかその書は男色大鑑。西鶴織留。世間胸算用。一日玉泉。日本
永代鑑。西鶴置土産。西鶴彼岸桜。西鶴名残の友。この餘いくばくもある
なり人と今日別れるとゝろを述べ備考を盡さゞれば西鶴らを
ゝどもれをさゝれりたり遊廓のうすどのゝ絵りてその書猥雑な
ゝるべ世の戯れ沒脱れぞ身をりて後に猥陽の梅園堂が諸藝太

平記 全本八冊元禄十五年三月刊布とゝのゝ西鶴が地獄めぐりといふものを作りて設ゝ
甚しく嘲弄してゝりきんどもゝのゝ書をゝれば西鶴に及ばざるゝ遠し
ゝりとゝのゝ遊仙嵐の作者張文成が名を族鳥といひて唐の玄宗の時
胸元のゝ人に本傳に文章猥褻ゝゝ君子の取らざるとゝ
日本人その文を弦重し金帛をゝ購求ゝ国ゝゝるとゝ
ゝものり静斎隨筆ゝもとゝゝを論じて本傳にいるゝ文辞
浮艶鄙猥ゝるゝ今の世に行る詩文一編もゝ文士の戒むべ
ゝるゝとゝ青銭学士とゝゝその文萬選萬中とゝ當時に誉を
ゝる文成ゝら後世に論定ゝゝゝのゝ戯謔もゝゝ生ざるいゝ遂
里洞房の癡情ゝゝ親しくたちゝるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ筆ゝゝゝその趣を盡ゝゝゝは作者のひゝめも推量られ徳を傷
ゝるゝゝゝゝ大約元禄年間の戯編をゝれば俳諧師の作戯ゝゝ箕山

が大鑑。両巴庖言 其山ハ負 鷺水が丹前艶男。其角ゲ五十四君、什名を四
徳門人也 園水が男女色競馬。五圃が京童 以下我他 不角が古鹿子ホ
まるでり繍像を
菱川師宣が筆
枚挙ス遑めなど又俳諧師ならぬども玲本昌三。浅井了意錦文流が
徒著述夥めれども我作の才ハ西鶴殊ス勝たを但その文ハ物を
賦せるのみ〳〵一部の趣向ハ八文字舎自笑。江嶋屋其碩西澤一
風ホ至る〳〵西鶴が筆意ス倣ひられを潤色〳〵一部の趣向をたて
るもあれどもなる〳〵浮艶鄙猥ス〳〵依客老圃の頤を解せ〳〵ばとも
らもその言を噪せり調高なれば賣ミとど賣ミハいやめ〳〵る西鶴ハ俳諧
師なれども世俗の口吟とする蕉句絶〳〵る雅俗雲壤の差そあれど
張文弟が詩文章の後世ス行れざるス〳〵といえん狩西鶴ハえ禄六年
癸酉八月十日ス没せを年五十二墳墓ハ大阪八町目寺町誓願寺本
堂の西の背壇南側之側目の中程ス有墓碑ハ仙皓西鶴と大書〳〵

え禄六年 云云下山鶴子北條園水建と左右ス彫刻せり路子玉水
ハ西鶴が没ス園水ハ西鶴が没後京ス浪花ス有〳〵七年そ蕉
菴を訪る〳〵名残友の序ス〳〵たを亦西鶴彼岸桜とりの冊子
ス〳〵の肖像を画ク辞世の蕉句を題せを摹寫ところ予が好ス
一癖の〳〵件の冊ス西鶴が送藁ス〳〵を江戸の書林志村孫七といふ
りの浪速の言肆ス就て〳〵乞りとえ〳〵禄七年甲戌の二月下旬ス彼岸
桜と名付て〳〵發行せるる〳〵岳水がちかるも書肆が後序ス〳〵もの
ハ是ハ肖像なるべ〳〵又巻尾ス如貞。幸方。萬海。信徳。才丸。園水ホ追善
の發句を載〳〵江戸俳諧師不知作者と題して別ス八句を附禄を江
戸の書肆がるる〳〵と送稿を乞〳〵板せ〳〵ゆる〳〵當時西鶴が我作の
世ス行れ〳〵ゆるる〳〵作者ハ名の多ス〳〵書肆ハ利の為ス彼も
一時ゆり是も亦一時ス〳〵

この肖像西鶴ひんぱんに図を模写

○羽川珍重は武蔵国埼玉郡川口村の人也三同と号本姓は真中氏俗称を七因辨五郎とのたまへる大田川口の舊名弥重はその画名なり父の諱は直知子が祖父のたゞのは叔父なりし弱官なりし江戸よりうつして画をまなびし元祖鳥居清信を師とし後は羽川より更に多欲富初の画名をあらゝぼ浪氏の家に往きて孫浪氏が妻は生涯娶らず仕ざれども武を捨ど只画をのみ旦暮に給し享保に至りてまた〳〵行ひ集その餘弥重の繡像なる冊子今罕に伝へ聞ざる老実まゝ言行を慎み好山敬水といへども肩衣を脱ぎるれば浮世論師まれ稀なる人物なりしとぞ人嘆賞せざるはなしいづれ年月あらん書肆某甲弥重

この図享保五年の印本九編の巻端ホンにあり今因てこれを模写

とて答へそのころ画よあらざるの利の形よ筆をとるとこるへ志画よある日い歌舞伎の画看板とゝども辞せるのるとゝ晩年よ又へ自画の繪馬を故郷川口なる稲荷五社へ奉納一又ゝ

そり名今うり衣食住を五郎よろゝ吉を近隣ようゝ藏板の繪本を画ゝてあられめとを叮嚀よ誘へども弥重絶ゝうけ引ど負ハ士の常ゝ人よ恵を受るのハ人をかそるれハ五年米の形よ稜を折るとを願ど況て是ゝよを餬んとを奉をハ售

肖像を画ゝ小引一巻を自記ゝて嫡姪恒直が二部よゝ画像と小引ハ宋よ係ゝて焼亡し繪馬のみ今ありとゝの弥重既よ老衰ゝ三同宣觀居士と法号ゝ宝暦四年七月廿二日川津同の郷蔡浪氏の家よ病死を辞世へたゝひのゝり隋日今一業ゝ宝永年七十餘歳江戸ハ谷沈の端東圓禅寺よ葬ゝる

羽川弥重家譜

◦堅光　慶長十七年壬子十一月四日没ス

二堅重　寛永十二年乙亥十一月十一日没ス

三利直　寛文十年庚戌二月二十二日没ス

四三同　直知季ゝ画名羽川弥重

五直知　享保三年戊戌四月朔日没

八　實語教

俗間の童子およ讀ゝ為ゝいもゝる実語教ゝいゝものハ空海の作ゝ

說あれども性靈集などに仰るべくもあらざるを拙なりのあれば弘法の
名を穢すべき法師の從ひ奉らんされとの書の世に行れて人目
膾炙するにつけてありたるその内長門本の平家物語八の上冊山門
沙汰をなしたるに扱緣
山門沙汰しられば南都の大衆座主經一卷實語教一卷を作
根本中堂に送り置云云 有異本
實語教 ものの道そのつくりの寶
恥なられ萬代のそしり
慈なられ一生のうらみ
四大 四つ 毋と子
身のがれがたきに書を読ども学問
身をもてなれば則世に破る
命終れども世に滅すること
恥なるをもつて愚人と
三つの夜 こんやこそ
学問なるに 滅と

眼を除て夜分を好
四所の私なるのみ
所にあるとしるべきなれど
師君に忠孝
又毋常にもいで
身をもつてのがれがたく
学問のなるべ
一無佛にとなりて
二宮にありと名づけて
三井の堂舍を燒て
四海に出ずして邪
天にも法にもなる惡行
飢を忍ぶ 陸奥
海陸の道を得ず
身をもつて
木石に異なるず
なほ畜生に
妻子に
命終るとも忘却すること
一文不通のたぐひ
二めぬけたる 山法師
三つのくるしを全うされ
四ちうきんを犯
五道生死のうらに

六くんびくのすぐさまく
七社の神輿をありそそ
八字の名をぐさくら孫
九重のさくらをするくれい
十種供雑よりらせて
百姓坊ぐして物をとそ
四命項礼卒ゐ軍
生くよ無くよ法けたまく

又ねのとどしぐさ一首

山法師あそのぐろうもうとくともちぐをぐえそをめさぐまれ
ちれい深三位入道頼政が山門菊幼の大衆をかくくひたりけるよ山門怒り
むらさぐ行る奈良法所ホ憤アくめく嘲哢そくそくれば実結

六波羅よくたくつくい
七道諸国へなぐさるま
八講どくよねをぞかく
公卿ちんぎよりちひの
十方ちくよくえまくふ
お使供をぐせめくえん
臆病ひとつの氣武ちく
在くくいくよ供をちん

抜をひり人のうをこまくへのうぐくまるりるの讀ーたるくえるよ法師の姫
まくをうえくるぐ治義のよ強を専せよ行れくるぐ赤塗見弦をよ源
卒盗賊記よもあくよえんたをくれも今様のものくめくん

閑よりふまるるの王免論衡。巻十二。程材篇第七張文夷幼
則筆墨手習。云云とえんえ又源氏物語ふくもるの巻あり往昔
よそ 私日漢もまるとのこ唱くるよいくよひとりてろ或ハ筆学或ハ
入木道よど唱ろりのあをめくくい部雅ちくぐ僻ゆるべー

(九) 我未也

我未也未来不ゐ 私漢暗合の財ゐり類書纂要巻二十一云昔杭
城有一猾賊。毎盗人ー家ー物ー去ー必用ー粉ー書其門ー曰ー我未
也。一至其所ー患□者ー夏。官府莫能論捕ー忽ー千ー復卒獲
之ー入ー獄賊ー狂ー獄ー久。厚結ー納ー獄卒ー毎ー殺ー獄卒ー某ー處ー埋有

金一宝若于。一平郊其言果獲。遂將金市酒肉與之醋飲。
語之曰。今夕少寛。片時与子出獄。五鼓便歸。決不相
累。卒聞言愕然。但受其賄。不當阻也。得寛縱之。遂踰
墻而出。逼城復被盗。其門各書曰。我亥也。至五鼓果
回獄中。卒見賊歸大喜。賊曰。我生矣。明日有司以聞
刺史。曰。我来也尚在。何將此人抵死。遂加以犯夜之
罪。釋之。以見知猾賊之志。之殺也。とのゝ原小説より出たる
類書纂要いろ〳〵ところの書名を挙げられ明人の癖なり其その書多く
小説を收むるを以て行れざる歟亦東鑑。天福二年三月十日。
記云。去二月比。南都天狗現怪一夜中。於人家千餘
宇書三字未来不云云非短慮之所覃。尤為奇怪曲亭子
云。唐山抗城の賊いへ家の門より我来也と書き天朝南都の獄

怪ハ人の戸毎ニ未来不と書き天朝の間いづれの処より對なるかあり
くりそこよ記しつ

十 天禄獣

天禄辟邪ハ霊獣なりと角の一つあるを天禄と一角の二つあるを辟邪とん
と孟康いへりと王者の道備りて天ゆる福をいたすといふ説れ
見ゆ沈約宋書 天朝 四融院即位元年より天禄と改られたるより天禄あるひい
天鹿くよ 作る唐山のそもその形狀定かならぬ歟揚用修いはく
蝦蟇のちがへるものなりとぞいへりける今も稀なるその圖をうつす頭ハ獅
子に似て角二つあり身ハ家より類して肉甲ありて又悍鷙なり天禄と
牛より類して牛よりも大きく一角あり大なる鱗あり子を多く産む和
名抄 金子老人の筆を備へて新なるの図を作りて併て古記
を攷證と或いはれよ喪録らんとて嘯物の君子と笑のそ

天禄獸

夢溪筆談云。至和中交趾獻麟。如牛而大通身皆大鱗。首有一角。考之記傳。與麟不類。當時有謂之山孚者。然孚不言有鱗。莫知其的。回詔欲謂之麟。則慮夷獠見欺。不謂之麟。則無以質之。止謂之異獸。最為慎重。有體。今以予觀之。殆天祿也。按漢書雲帝中平三年。鑄天祿蝦蟆于平津門外。注云。天祿獸名。今鄧州南陽縣北。宗資碑。彫兩獸鐫其膊。一曰天祿。一曰辟邪。元豐中予過鄧境間。此石獸尚在。使人墨其所刻。天祿辟邪字。觀之似篆。似隸。其獸有角鬣。大鱗如手掌。南豐曾阜為南陽令。題宗資碑陰云。二獸膊之所刻。獨在製極巧高七八尺。尾鬣皆鱗甲。莫知何象而名此也。今詳其形甚類交趾所獻異獸。知其必天祿也。ホ載千說類巻之六十二

㊀ 伊豆の海

伊豆の國の海大浦よりうびて咲山とゆをむ北條家の守將ぶるる上野が城蹟とゝの山究めて好景なり和歌浦見げ湖に茶屋ゲ婆ゐど字一ちる処あり。ゝの山に茶屋ゲ婆と呼る処ゝ海上過ゆるびれば奇巖突出ゝ項に小松の生茂るもあり巖のあひだ〻ゝ虎とな〻ゝ大燈口のごゝゐるゝの間を約する小松の溝やくあるさま画くとも筆ゐゐびゝるべし大鳴三宅傳るゝの蔭のひめゝうゐえちる竹ゝ波ゐ動ゝゐ微妙ゝ絶引ゝる蜑が唄声白帆ゝる舟人が樟の歌ゝゝ腸を洗ゝ佳境ゐゝ山い芝生ゐゝ高ゝゝゝ小松がゝゐ臥ちる鹿のゝゐる義やゐゐん石郎ゐ石天咲の景迹い物ゐる書記ちればゝの沈み拾ぶ人ゐゐゝ身ゆれゝ都の人ゐも結り付ゆめれどゝの咲山を

おもこ〳〵それより苫屋に宵を曙より豆桐の間を経歴り日浦賀より田〳〵
辺〳〵を相模灘二十餘里を私らゆく行るその日亭午の比風のおくるを
ゆく〳〵三湾の浦〳〵漕よりそよりて人もそれも私らゆめ〳〵て猿宿より逗留を
漕らり十七八所ばかりをゆけば宮川と唱へ村のそらの処に文治年間鎌倉右
大将伊勢の宮川の農家をたづねしかるその名めとりふ農夫某甲
が家にて親鸞上人の身ぐるを名号とのみのをあがまど縁起あり奇異
なるのみ次の日己の時ゆゆくらだちんとりふ比追風らしとあらく私
のくまらを左まるを大鳴をなるめ右まるを熱海伊東が彼をえらへまで
渡らを海上一里ばかりをたちまちれる端唄と唱る小唄ありり漁戸僅
に三十六軒ばかり外に苫屋すり昔は伊東ばかりの織女端唄の傳夫と相馴
るるのあれば夜に海上一里が程を個だけ泳めるに長彼と脱ぐ所に
載〳〵氷を砕く磐の水に戦るに異うぞ浮森の麦を結び

もあくに又個だけ泳めるとぞ寝に情慾のゆるめるとして是れを忘るべ人
の世の常なれども金を擲〳〵家をうひ身をほろぼす都人に比れば
これらは是れに似く意ばかり化る髪をすりとも法を瑜楽を破る
にあらぬ波濤の上もいと安るるを船中のつれ〳〵にるる物語をさすべ
も耳あるとかりにしたるに鯨鯢の浪に群れ鯨鯢の潮をふれるさ
眼前にえてるに伊豆の海にて鯨をいるとい稀にとるん猿にるのの幸
るしが常に水行にされる人もるるとち頻〳〵とうちふたるるに子が面
若〳〵恐く気色を舟人ホひぶめとに戸人にへめづらとて器の
ゆるり子いるは壮年なりれど是れをたふざるにあらぬと既にこの船に
乗るとはるとともひるに人の死生の瞬息の中にあり何の処に命の終
らざるんとれて彼に病んうり乗〳〵ざるにたるとひーうぶ舟人にとるまや
しかるに是れり今にうぶ人にるるとも放るに渡海の船に乗に暴荒

馮河しく悔あるべしと聖の教を忘れて愚なる者の胃戌の時より田より青
ぬかの田いよ戸の港にあれば文字あり才人あり呉邊鄙良所に遇べし書よ之
しよ苦あり此彼圖居しく夜話するに頃しも九月のとゝあり名れば大浦の
よ鳥武山の鹿の声を居るぐしひとつ夜よ学つ猿森の枕を融へ荒蹟
ろ浪の鼓彩湾よりよ松の琴とぐく腸を動と世わりと眠あと配不の
川をゝんとゆゝんろ辯言も世を捨しろうよあるべしや因より一里あり田舎
ろ蓮臺寺村よ温泉あり近属湯場本よあを道ろりけたりて醫師養菴
老人よ勝引れあるく浴とろよその湯のきゝらあるへ湯ろよ物ゝーうゝ
温泉の芋一種と粘糊の外よ饗べ食べたりのるとゝよ殊さゝよ辺鄙なれば
ろゝれもいとをゝ土人寒梅と字ろゝ田ゝり五里の山ゆよ冬花さく桜あ
藍玉ろゝ外よ下田より二里頼政の室葛蒲前の石墳あり韮山の儒生秋

山氏その事を記して墓碑を建たを亦越後よも葛蒲前の石墳ありとゝ雖
後名寄よえたを葛蒲前のゝ愚考あれど今とよ賛ゝ長鶴石部
の眺望い丹後の宮津久世侯の文殊堂ゝも似たゝん欲。ゝ石ゝ彫の立指
を彫りゝ名けたゝんよ今三尊よあゝれゝ二ッ損じたゝゝや青
嶋よ弘法大師のゝ彫りゝれよ財ゝゝ貧ゝ予曩よ墨本一幅を購ゝ是
海嶋風土記よ照しみれば彼青嶋よ云青嶋よ云れゝ波ゝりゝのほゝり紀の澤と唱る処ゝり南の方よ蓋菁
の小社ゝりゝ空海の造たる辨財天を安置とその彩像を彫ゝれば長
一尺有餘幅ハ七八寸もあるべく厚ゝ一寸ゝ有る古れ色ゝの物の表よ座
像の辨天并よ十五童子を彫刻し裏よ文を押入れゝる源ゝりて指の小鶴
ゝゝ鮮明よえたをその文字老の如しゝよ安置の未歴ハ詳ゝゝと
ゝゝれば石の弥陀ハ海岸の河中よゝの形ゝる石ゝよりゝ

青嶋弘財天法形

天長二年七月七日

於江嶋辯財天法

秘密護摩手

空海

一万座奉修行

以其灰此形像作者也

唱ふるに手ぶり水の井水りて海奥を畜ふ人おりてその工夫をはく
ふ方二所ばかりある生簀を造りて鯛鰈鮑鰒鰕あん
ごまめくの海奥をすりあつめ毎日生簀の側一柄を汲てり別に一柄の井の水を

汲のぞこと数日よりのびてあがえび潮の悪うなれば皆井水とあつとなれども水の
増減あり海奥ちくびとり井水に熟皆死ぬるとのこの海邊
ある人をそそめ智を用るよりあるものあり亦大例の漁材に白水郎あり彼
等が鰒をとるをうれば海底へ二度潜ざれば一枚の鰒ハ獲がたし彼も陸居
志るべう海底に物を求むその辛苦推てしるべし都會の人ハ安坐して百
錢を費やせば飽もぐに鰒を食へ共未を鋤て粒く皆辛苦に成農夫の
ごとくをしらべ漁者の苦労も又ひとしかるべしこれらハ殺生常の不行なり
海底に擂盆形したる処あり又横に洞あり常に渦巻て潮涌て近
つくがごとしこの処に到れば大鰒を獲んと囊を揚て物を求ぐ如し大
例に廿餘人の白水郎のれど己とを沒ざるとなその処へ入るものハ只天の
命に絶てすとて四人坂野犢のひろ東國に女蜜ゑて男ハ息の短
ものうれば苦辛もさそとらひ生ゑる犢樂に海士といふ逼曲を作をそなハ

日本紀　允恭紀にいはく阿波の男狭磯がまを潜へなるゝ近畿山
海名産問曾といふものあるもの世俗もをさ〳〵ちがり今技をもつて蜑
の殊をとるといふ異國より南村輟耕録云廣東采珠之人懸
組于腰沈入海中良久得殊撼甚組船上人挈出之
蕊于龜鼉蛟龍之腹者比比有焉名曰鳥嚬戸蛋音
但。元史ぬくれば猿樂の作者は男狭磯がまと輟耕録の説を取て海士の
謡曲を作れるなるべし田の近浦馬良甲良大洲こそりの童子ホ十四五歳以
ホ八九歳なるべ四人を一隊として漢舟を操り乱杭のごとく海中なる
巖の間を自在に漕繞らしく物する形勢目を驚し膽を吟さしめ
とゝもとゝめ〳〵幼稚なる水練ならん生涯身を一葉のうちに
石行さりしぐれの年ゝなりん大洲なる江戸へ推送るとく榮螺を積たる
舟伊東崎にて暴風にあひその舟五艘ともに反覆るを楫取八人のみ漂

中に跳入て舟を引起し剰波の底に沈さるゝたる榮螺を悉拾ひ元
舊のごとく舟に積のゝとそのタられに大江戸なる日本橋へ傳らしとぞん
なる水練の達者も亦時と共に水艱を沿脱まじ予が田に拯整ち
前の年伊勢の鳥羽なる鯉節を積のゝ〳〵江戸へ推送るとく楫取八
九人乘なりける私石郎権現のやうなる長鶴の鼻に散しなる暴風暴雨契
こく憑さつたる三條の纜二條彩離たる岸にとゝくられをそれとあれなんと
叫へども助るよしもなく件の舟に乘るのこる壯なる男どもみて只一人老
なるめりその翁壯佼ホにふゝ〳〵纜もりづゝ一さゝぐよりねこの舟り漢に吐
出されるべ雖ども生べ汝ホにれを捨て彼を儒て岸にのぼれりしとす
なる壯佼ホ中もあくどりぐろひとりとゝぐに脱ぐ〳〵ハりとるよ
こそ死のあとにふを公納いさめ〳〵を勸解ゝくられ老たるよ餘命〳〵も
あるにこそ一身の力をなく壯なるものどもを殺さば誰り故郷に帰さて

の妻に告げんとくくとらをどめ壮佼ホハ己とを汐ど哀別の涙を禁
めひとりふべれいすなびれるろろぐ叮嚀に契を汐く毋の〜衣を脱捨て逆よく
浪を物ともせぐ水中に飛入り元来水練を汐ろ俵を潜て恙な
く岸へのぼらんと疑ひすとらひ〜ぐ霧い高ち念イ〜て死をかん外
枕をすめて〜行る残る一條の纜もを断離を舟い忽に漕へ漕ひ出て往
方ちくまぐりひとさんとちら〜のあるく雨霰風軟ぐつ翁が舟い恙なく
次の日檜垣舶に扶引を中田の港に着る彼壮佼ホハ水ゆに死ろろん一人が
死殿だ田えぐちち〜とそ抑死生い命あり壮るるのい水練を汐のそて彼底
に死〜老ちい舟にありて〜遂ゐ元とを汐ろり智もしのむ〜ぐ勇も強るハ
ろぐ人間の機変めるるに拝ろ呉焼ぐ元のそ凡渡海の舶人い最神佛
を信ると就中 伊勢太神宮の擁護掲焉ゆ田ある舶長のそりる遇
海の舶動ぐれば漏て潮水の入るとありとの漏をとちんとちる物験積入れ
る舶ろれば悉られをとを除ることるるぐそのとる紙を裏て圍とく艫の間中
の間客間と書けけ押ちろえて〜盆よの〜丹誠祈念〜く 太神宮の入廟
をちく〜三つの圍を搖れ探ぐらの中一つの圍を麻の紙へ新ておぐ〜ちる
圍をひろれて〜えるに武ハ中の間とあるるれい則中の間の産物を艫の間客貫へ
ろりれ武ハ艫間とあるられいその産物をは中の間客ろく積入れて舶底をえ
ろに果〜ちぐどやぐく栓を揮漏を禦ぐく悉ぐ元に至ちりこの餘桁撲
國三浦の箭取不動を念ぐるるれい夜ちをあげ〜ぐ元ぐあの江嶋の辨才天
秋葉權現淺草寺の現世音ちその禱るに隨て應験あり西国ろい厳嶋の
弁財天瓔岐の金毘羅その霊験ちる等る〜人のらくちる所ちとのへ〜ヤ〜ち
摩山ろいの天蛇神の霊験も証べ〜ぐ元に拝ぐと十日のちをまに江戸へ帰る
や田をたろく〜天城山のうく麓ぐれば蓮臺寺村をるろく〜小鍋坂大鍋坂を
ろ山路めりり彷惑〜とそ郷道者に引をは〜ぐ行に樵夫にあひりて

ゝ湯が湧くいひ〜ぞくうあると問へば天城山を越えてそこと答ふりと遥かれば

小鶴坂大鶴坂のあるとももとぐ径をさ〜陽が暮のあとにはそ〜ゆく〜

梨本村に宿るわ田ゝこもちぐ〜五里ゝるほど日は高くれど天城山六里を越

ゝるれば草鞋と足捨足濯ぐ〜わ四ゝ倦〜ゝ暮れるをこゝとをうへ〜ゝ

ちの処天城山の麓まで〜人家はいと十ゝぐこもあるべ〜飛泉あり翠竹青〜旅宿

のひゝひとゝるる圓通堂ありそこのほゝゝ墓所あり日のりそこそこ独り物

ゝるく枕にとぐ〜虫の声のこ慰ひぐ夜もるるれば冷ん夜とぐ〜ゝも寝られ

ぬ観音堂のゝこに征の音とゝるりとゝ山がそ〜攻御のるるどゝひゝつこ

ひともあく曉にゝれ出ぬ山の家にゆれゝん故にのゝぶぬけぐゝの家をゝ

こ辨ずるに何ともなくものいふゝと旅宿の婦が多く糠ぐこたる物り飯の大

況のゝを二ゝ紙につこ〜盃飾の料にそ遍手ゝを行囊に入れ御条者

を肩ゝ天城山を越へゝ六里の山中人煙をそこどゝるゝ茂林ふゝ充ま

谷ゝゝ足を運ぶの地僅に二三尺にゝるべ砂石緑くとそ石滴のゝく迷滑べ

壁ゝとに里ゝとゝるゝ御導者ゝゝこゝく陽が嶋ゝぐゝ人家ゝ草

鞋を齎〜ゝのゝこゝと問ゝにその海ゝぐゝしゝがゝゝ礼と限ゝゝ導者

ゝゝ足をこゝの山にゝく草鞋を濡ゝ足ゝ跣足ゝく登ゝのみぐゝ近麓

ゝゝく樵夫が草鞋を二百銭に換ゝゝ旅客ゝゝ樵夫も草鞋を賣ゝ

ゝ四日の活業を止ゝゝ〜ゝゝゝ二百銭を沿ゝゝも貪ゝゝ〜ゝ色

ゝ草鞋を濡ゝ足のゝゝゝゝ〜ゝ足の運びもゝゝゝゝ背に汗を

が息ゝれゝく渇に堪ぐれども蛇毒を恐ゝれゝ石滴を掬ぐ巓ゝゝゝ

ゝ厚風を建ゝるぐく端く項に登ゝそゝれば甚険〜僅に席八九枚を布

べ〜石に尻ゝゝ握飯をとり出ゝく食ゝに咽喉を潤ぐべゝゝゝ

田のゝゝを入ゝゝ沙ゝぐ海陸眼ゝゝこの山夏ゝ蛭ゝ〜人の足音ゝれが樹上

ゝ蔭ゝゝゝゝゝゝを潔ぐゝぐ〜又ゝゝ七月のゝゝゝ内の入ゝゝ猿

より逐ひてこゝまでくるに嶺てなび憩ひもあへず峯をゆくに谷も紅葉の濃なるさま
錦をひけるごとくにして異なるねど頭を擡げて仰もあげめば三里ばかり
さし欲石の赤肌ところどころ大横石ゆゑと眼をとゞめてみんがゝ辛ざ
湯が嶋村に到るに未の時いたりぬ山中まくに炭焼の翁二人と行脚一人あり
この〻終に亦入迹をたゞに一失られを守れば萬卒も越がたしと咲えて蜀の横
道もとの天城にいたるべしと疲労られば湯が嶋に宿りて御導者を
わ〻に次の日猿養寺より訪ゝ一四温泉に浴して三郎阿布比止の渡北條をこえ
ゆくに鳴り伊豆に入る暖地にして四方に南へゆくに出でゝ溪に
雪の降て稀なり秋つ花鹿声を聞くめば蛇穴にかくれ十月小春
なれど江戸を去れて五十里ばかりに天城の険阻あれば究めゝ邉鄙にて出
石重ゝて唐画の山水をなすに風俗の変るものゝ
東海道も小田原より江戸と異なるねど箱根と越えべきに江戸に

仰ぐ嶋田金谷の間僅に一里ばかりも大堰河を隔てゝ風俗ことゝ異なり
宇津山を越えべ又一変をなす業者の津七里をゆくに風俗大なるがら
ゆ鈴鹿山を越ゝ又一変をなすに河を隔てゝ大同小異なり江
隔てゝ言語風俗ことゝ異なるに人ら
ところをなるべきに